慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョン、ラスキンの立脚地より見たる俳句
Sub Title	
Author	忽滑谷, 快天
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.1, No.6 (1909. 7) ,p.49- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19090701-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

とを己の味方とせり。レオの將に永逝せんとする頃には、彼は外面上の成功を得たり。彼の方策にして實行せんと勤めたる目的は、最も幸福なる結果を來さんとせり。而も彼の生命の長からざりしは、彼の一身に取りて幸甚なりしと云ふ可し。彼の死後事局一變せり、而して彼は滔々として進み來る法王權に不利なる勢力に抵抗して能く之を防止し得たりと信ずるは極めて困難なり。其勢力の實に強大なるは彼に繼で法位に登りたる法王の悲しくも認めたる處なり。歐洲の政治上の發達は、舊制度に對する人民の態度を一變し、智識上の發達は舊思想に對する態度を一變せり。レオ第十世は野心に驅られて、自由を屈し良心を破壞せんとして償ふ可からざるの失敗を爲せり。ルーテルが教會の腐敗を叱責して其主張を撤回せざりしは實に其宜しきを得たるものなり。彼は豫言者の力を以て攝理の意思を語り、神の言語と良心の自由の優れるものなることを立證せるものなり。而して傳說と權威とは全く粉碎されたり而して歷史の進步の道は開かれたりと云ふ可きなり。

ジヨン、ラスキンの立脚地より見たる俳句

忽滑谷快天

眞正の藝術とは如何なるものかといふに就て、ラスキンは『ヴエニスの石』に大要左の如く說いてゐる。先づ學問と藝術とには二樣の差違點があつて、學問は知る者、藝術は製作する者、學問は事物をありのまゝに扱ふ者、藝術は事物が心靈に感ずるやうに扱ふ者である。學問上より見れば太陽は地球より九千五百萬哩の距離にあつて、地球の百十一倍の大さを有し、二十五日十四時四分間に其軸に於て自轉する。されど藝術上より見れば右樣のことを知る必要はない、藝術は但に太陽を神化して光明赫灼たる靈神としてもよし、或は之を擬人して眉目秀麗なる男子が白馬金鞍に跨つた處としてもよい。藝術は事物の精神を洞觀する力あるもので、事物の外相に關する眞を發見するのみでなく、其中心たる本質に關する眞を發揮するものであるから、學問と比較すれば藝術の領域は一層廣漠である、幷は心靈界は

物質界より更に廣大なるものであるに因る。

事物には外部に現れたる風丰と其内部に秘在せる神髄と二つある。例せば吾人の顔面の如き、他人の顔面と異る所の形狀、色澤、鬚眉等の外相を有するは勿論であるが、併し此等は單に内部なる不可見的の力、卽ち心靈の外現したる者に外ならぬ。故に眞の藝術は事物に於ける外部の風丰を透過して内部に秘在せる神髄を捕へるのである。是の如く事物を透過して其本質の眞を觀破し、之を其作品上に發揮する人あらば、這は眞の藝術家といふべく、其作物は眞の藝術と稱するに足るのである。

此力なき者は如何に其描寫せる線が正確でも、如何に其色彩が眞に迫つても、幵は單純なる模寫に止つて、活きた藝術でない、生命ある、靈機ある作品でない。玆に三個の肖像があると假定するに、第一の肖像は耳目鼻口より髮毛鬚髯まで本人の如く極めて精密に描かれてあるが、少しも表情がないとする。此肖像を見たなら、近親朋友は言ふもさらなり、其飼犬でも必ず其肖像の誰なるかは認めるであらう。又第二の肖像は本人の耳目鼻口を等閑に附して精密に描いてない、併し眼光の閃き、唇齒の緊縮等、本人が精神の激昂したる時に見らるゝやうに畫いてあるとする。此場合には右の肖像が眞を得たるものと認むるものは恐くは近親朋友のみであらう。又第三の肖像は本人の普通の表情は全く描いてない。併し本人の内部に秘在せる心情、及び彼の最も高等なる心力が一度に活動したる瞬間の風采を畫いてあるとする。此場合には實際右の如き時に當つて本人を見た人でなければ眞を得た者とは認めぬであらう。

第一の肖像は身體の偶性を示したに過ぎぬ、されば氣候により、食物により、時によりて變ぜらるべき身體の一部を模したのみである。又第二の肖像は心靈が肉體に顯はれた處を描いたのであるが、習慣や教育の結果として無意又は有意に出でたる情の現れで、他人と共通の者で、内心の奥底に深く根ざす所の者を寫したのでない。之に反して第三の肖像は最も内部に秘在せる本人の特別なる心性を捕へ、唯神のみ知る所の彼の秘密を示してゐる。斯の如くにして始めて眞に肖像と稱するに足ると思ふ。

又一方より見れば藝術は一の讃嘆である。偉大なる藝術は偉大なる心靈が其愛

好する物に對して歡喜踊躍する心狀を表現したものである。されば大なる藝術は決して冷靜なる手を以て作り得べきものでない。眞の藝術家は習慣的に其愛好する物を尊敬するの態度をとる、從つて其作品には崇拜の念が彰はるるを常とする。果して然れば大なる藝術家は其心を以て觀、其心を以て感じ、而して其觀たる所、其感じたる所を現はすの力がなくてはならぬ。且つや其感じたる所、其觀たる所が最も高く最も眞にして、其現はしたる所が最も忠實であれば、それが理想の藝術家である。

是を以て藝術は作者の觀念を現はす者といふてもよい。例せば作者が一個の古聖人なる觀念を有するとせば此觀念を彫像に現はしても、人物畫に現はしても、詩文に現はしても、何れも皆藝術たるを失はぬ。されば大なる藝術は大なる觀念を觀者に傳ふるもので、從つて最大なる觀念の最大多數を觀者に傳ふる者を最大の藝術といふことができる。これラスキンが最大なる藝術家とは其作品に最大なる觀念の最大多數を含蓄せしむる人であると謂うた所以である。

以上ラスキンの見地より我國の俳人を見るに、松永貞德が

俳諧は面白き事ある時興に乘じていひ出し、人をも喜ばしめ、我れもたのしむ道といふたのは、俳諧を娯樂遊戯とのみ心得て眞の藝術であるとの確信が無かつたので、其思想の幼稚なるは謂ふ迄もないが、ラスキンの所謂藝術は一の讃嘆なりとの考ひに多少符合する所がある。また齋藤德元が

俳諧は一體といへども二體あり。一には心のはいかい、二つには詞のはいかいなり。心の俳諧といふは、詞なだらかにして心に興をふくめり、言葉の俳諧と申すは、秀句にかゝり、利口を詮にいひ立つる也。

と說いて、

まん丸に出れど長き春日かな　宗鑑
撫子や夏野のはらのおとし種　守武

といふやうに緣語係語を用ひて詞にのみ花を咲かせる外に、心卽ち思想の上に重きを置くの必要を示したのは、ラスキンが肖像畫の論に、耳目の形容に重きを置かずして其內心の表現に力を用ふるの說に似て面白い所がある。されど芭蕉以前の俳諧は滑稽洒落を旨として淺薄卑俗なるが多い、

霞さへまだらに立や寅の年　五四　貞德

早蕨や深山の雪に懷ろ手　貞室

天も花に醉るか雲の亂れ足　立圃

からくに身は成果て何とせみ　西武

鳴聲を哀れとおぼしめし鹿哉　梅盛

一僕とぼくくありく花見哉　季吟

稻妻のおもかげ見てや夜這星　令德

三界も二階も照らす月見哉　玄札

浪花津にさくやの雨や梅の花　宗因

世の中や蝶々とまれかくもあれ　同

姫瓜に三千の林檎顏色なし　常矩

斯く狂言と輕口にのみ走つたのではラスキンの所謂自然界に現はれたる外部の風丰さへも模することは覺束ない況や其中に秘在せる神髓をや。

吾人の觀察する所に依れば芭蕉以前の俳句には眞面目の態度が缺けてゐる、從て

事物の外面を糊塗し去つて得たりとするの風がある。一々の句に輕浮の心が見えて誠實の情と莊重の態度がない、誠實は道德の大本にして同時に藝術の基礎である、誠實の無い物に永久の價値あるものは一つもない。

ラスキンの意見に從へば吾人が藝術上の作品より得べき快感の因由は大略五つに分類することができる。其第一は力で、卽ち藝術製作の爲に費されたる身心の力が作品の上に現はれる。此力には種々雜多の階級がある譯で、下は指尖や腕頭の力より、上は最高等なる智力や情操までを含んでゐる。例せば足利町鍛阿寺の古寶物の中に南蠻國より傳來の短劍といふのがある、此劍は其柄より刀室の全部に亘つて精密なる彫刻が施してある、是の如き彫刻に接する時、吾人は之が爲に費されたる時間と勞力とを考へて何となく愉快に感ずる、また日光の社殿の如き柱より門扉に至るまで悉く精巧なる彫刻を以て飾られてある、是に於て乎、吾人は之を觀て如何に多く身心の勞力が費されたを察し、快感を惹起するのである。されば小は芥子粒に刻されたる大黑天より、大は奈良の大佛や、ローズ港口に跨れるアポローの大像に至るまで吾人に力の觀念を與へぬものはない。これは單に彫刻

のみではない、繪畫でも音樂でも詩でも同樣である。且つ勞力に加ふるに熟練を以てしたならば一層力の感を强むべく、勞力と熟練に加ふるに更に巧妙と判斷力を以てしたならば十倍の力を示すに足る。さすれば藝術に用ひられたる身心の力が益々高等となればなる程、吾人は愈々高等なる快感を得るのである。

吾人の身心には大なる力もあり、小なる力もあり、鼻しき力もあり、貴き力もある。而して小なる力は小なる者の製作に用ひられ、大なる力は大なる者の製作に用ひられ、鼻しき力は鼻しき者、貴き力は貴き者の製作に用ひらるゝ。偉大なる力が偉大なる者の製作に用ひられた時、其作品は優秀なる者と爲る。此優秀と稱する文字は偉大なる力が多くの困難に打勝つて成効したるを意味するので、優秀なる者とは美麗なる者、有用なる者、善良なる者などと異つた意味をもつのである。果して然れば小なる者、鼻しき者を主題として優秀なる藝術を得ることは不可能である、例せば孑孑や、虻や、蚊を主題として偉大なる畫を描いたり、優秀なる彫刻や、音樂を作ることはできぬ。

却説以上ラスキンの見地より俳句を觀察するに、其主題の選擇に於て餘り自由過ぎる觀がある。例せば夏期の動物に毛蟲、蚊、蠅、蚤、孑孑、蛭、蛞蝓などが主題と爲つてゐる。最も此等の動物も他の物との取り合せさへ宜しきを得れば立派に詩化せらるゝは勿論であるが、其場合には他の物を詠じたので此等の動物其物を詠じたのではない。此の如く鼻しくして且つ價値なき動物を藝術の主題とするは正當の方法でない。されば此等の動物其物を詠じたる句に名句は一つもない。

今人の句を二三擧げて見やう。

蹈みつけて臓腑の青き毛蟲かな　柏浦
くちばしの長き藪蚊が晝を蟄す　澱橋
蠅憎し打つ氣なければよりつかず　子規
輝に蚤の夫婦の契りかな　禿山
孑孑や金魚の糞となりにけり　守水老
芋の葉に蛭を包むや二三疋　梅影
蛞蝓やかたまり合ひて石の下　岨人

斯の如き句に詩美などのある筈がない、否、詩美が無いだけなら宜いが、鼻しい、汚れ

たやうな不快の念が生ずる。古人にも斯かる主題で好句を吐いた人は實に稀である。

隙明や蚤の出で行く耳の穴	丈竹
古井戸や蚊に飛ぶ魚の音闇し	蕪村
蠅打をのがるゝ蠅の命かな	淵季
朝風に毛を吹かれゐる毛蟲かな	蕪村
子子の水や長沙の裏借家	同

蕪村ほどの手腕を以てしても此等の動物を詩化するは容易でない況や蕪村以下の俳人をや。

子や泣ん其子の母も蚊の喰ん	嵐蘭
やれ打つな蠅が手をすり足をする	一茶

の如きは珍しき好句であるが、二句共に動物其物は作者が抒情の媒介となるに止つてゐる。されば蚊と蠅の句といふよりは人情の美しい所を詠じた句といふが適當であらう。是を以て吾人は俳句の詩材として成るべく高雅なる者を選んで

高雅なる想を抒ふるを努めたいと思ふ。

藝術に於て力の現はれるのは困難に打勝つにある、然れども複雑なる者が必ずしも困難であるのではない、否、複雑なるより簡潔なるが卻て困難である。且つ又熟錬なる手腕を多方面に揮ふのが必ずしも困難であるのではない、否、其手腕を適當の場處だけに制限して用ひないのが頗る困難である。俳句が何人にも入り易くして實際上達する人の少いのは此點にある、何となれば俳句は詩形が小さい、極めて簡潔である、畫工が一筆か二筆で一個の鳥などを描き了るやうに、一句か二句に作者の觀念を現はし了らねばならぬ。又適當な處に適當な句を配置して少しも緩みのないやうにせねばならぬ。これ俳句が他の歌や詩より詩形の小なるだけ勁健なる所があり力がある所以である。

ラスキンは藝術に力の現るる原因として簡單といふことを擧げてゐる。簡單とは目的に對して手段の簡單なることで、作者の觀念を現はす爲に用ふる手段が簡單であれば其處に力が彰はるる。例せば秋の景色を畫く爲に山林の紅葉を描いたり、五穀の熟した有樣を寫したり、秋草を畫いたり、鹿を描いたり、種々の手段を用

ねて秋景を現はしたのでは力が見えぬ、けれども其用ひる手段が極めて少くして秋景が充分に現れたなら其處に力が彰はれてくる。即ち芭蕉の

枯枝に烏とまりけり秋の暮　芭蕉

のやうに枯枝と烏だけで秋の全景を充分に描き了るのは非凡の手腕を要する。

櫻に就ても

奈良七重七堂伽籃八重櫻　同

木のもとに汁も膾も櫻哉　蕪村

雲を呑て花を吐くなる芳野山　同

嵯峨ひと日閑院樣の櫻哉

など詠じて何れも錦繡と美を爭ふの風情がある、されど櫻の美を現はすに多くの手段を用ゐてある。然るに

これはこれはとばかり花の芳野山　貞室

の句には少しも種々の手段を弄せずして櫻花の美觀を遺憾なく言ひ顯はしてある、これ其力ある所以である。

次に藝術に力の現はれる原因は神秘である、神秘とは宇宙の萬象が實に不可思議で造化の大威力を示す如く、藝術も如何にしてできたか、不思議に思はるゝ程であれば其處に力が彰はるゝ。即ち其作品が神品鬼工といふべく、何とも妙と評するより外はないとすれば充分に力が表はるる譯である。古來俳句に神品鬼工といふやうな名作はないが、今日の吾人から見て企て及ぶやうに思はるる句と、到底企て及ぶことはできぬと思ふ句がある。乃ち到底他人に企て及ぶことのできぬ句は所謂神秘なのである。

松蟲のりんとも言はず黑茶碗

は蘭雪ならではよめず、

古池や蛙飛び込む水の音

は芭蕉ならではよめず

長松が親の名でくる御慶哉

は野坡ならではよめず、

春の海終日のたり〳〵哉

は蕪村ならではよめず、

名月や江戸の奴等が何知つて

は一茶ならではよめず、

白炭や燒かぬ昔の雪の枝

は忠知ならではよめぬ句であらう。

復次に藝術に力の現はれる原因は速度である。速度とは作者に充分の知識と判斷とがあつて其計劃を實行する上に少しも躊躇なく、一氣に製作するをいふのである。例せば畫工が線を畫くが如き、躊躇しつゝひいた線よりは一氣にひいた線は力がある、小心翼々としてひいた線よりは大膽にひいた線は力がある。何れにしても速度の高いのが其低いのより力が多く現はれる譯である。芭蕉が

發句のすがたは青柳の小雨に垂れたるが如くにして、微風にあやなすをもかし。

附方は薄月の夜に、梅のどことなく馨るが如く、竹林を隔てかすかに琴聲を聞くが如く、情は心裏の花をもたづね、眞如の月をも觀ずべし、口は飛流の直ちに下るが如く句を吐くべし。

と說いたのは此消息を漏したのであらう。さりながら句は琢磨鍛錬の功を缺いて宜いといふのではない琢磨鍛錬の功は句に大なる力を與ふるは謂ふ迄もない。信州の白雄の如きは平素句を案ずるに木製の玉を掌上に撫して、圓滑流麗なる句を吐いた、乃ち

鳴けば鳴く二つの山の閑子鳥

二またになりて霞める野川哉

水に臨む欄干高し青嵐

など彫琢の功によるのであらう。

吾人が藝術上の作品より得べき快感の第二因は模倣である。模倣とは作品が模寫せられたる物と酷肖するをいふので、若し其作品にして實物と誤らるゝ程に善く似てゐたならば吾人は之に依て意外の思ひを爲して快感を生ずる。例せば鷄が葡萄の繪を見て實物と誤解して啄まんとするほど酷似してゐれば吾人は必ず意外の思ひを爲して快感を生ずる。此場合の快感は吾人が巧みなる手品を觀て起す快感と同じである。故にこれには二つの必要なる條件がある、卽ち一方には

實物と異らぬことを示しつゝ、他方に實物に非るを示すのである。例せば眼を以て繪を見たる時は如何にしても實物のやうに見えるが、指を以て觸れて觀れば全く實物でないのが知れる。斯の如き完全なる模倣は繪畫に於てのみ可能で、彫刻に於ては不可能である。假りに一の肖像畫があつて本人と誤らるゝ程にできたとする。此肖像畫は本人の如く見える。併しこれを大理石の彫像と爲す時は、本人の身體の如く見えるけれども、本人の如くには見えぬ。

模倣より生ずる快感は模せられたる物の性質には毫も關係はない、模倣が吾人を欺いて、吾人の眼を昧ますの多少によりて快感に深淺があるのみである。是を以て模倣さへ充分なれば將軍を模したると其乘馬を模したると毫も差別はない、同じく快感を惹起する。

然れども模倣より生ずる快感は手品を觀て生ずる快感と同じであるから、頗る卑しいものであつて、藝術より得る快感の中最も賤しむべきものである。其第一の理由は模倣より生ずる快感は覺官的で、作者の思想や感情を味ふて後に得る快感でなく、覺官で見た所に止るものである。覺官的の快樂が精神的の快樂より劣等なるは謂ふ迄もない。第二の理由は模倣は無價値なる物、些少なる物に於ては可能であるが、價値あるもの、偉大なるものに對しては不可能である。例せば畫工は猫や三味線ならば全く實物のやうに模倣して、吾人は之に依て欺かるるかも知れぬ、されど彼は富士山を模し、大洋を模して實物と思はしむることはできぬ。彼は果物を模倣することはできやう、けれども老松を模倣することはできぬ。彼は草花を模倣することはできやう、けれども曠野を模倣することはできぬ。第三の理由は模倣は事物の外面に現はれたる形相を捕へるのみで、事物の內面に秘在する神髓を捕へる力がない。これ模倣の藝術上賤しむ可き所以であるとラスキンは謂ふてゐる。

却說此見地より俳句を見るに俳句は客觀的に『ありの儘』を詠めば宜いなどいふ說は取るに足らぬ。芭蕉の古池の句を以て、ありの儘を詠んだものと思ふは大なる謬見である。古池の句は閑寂幽邃の神髓を一句に道破したもので、客觀的ではなく主觀的の句である。單純に客觀のみを抒べて、恰も畫工が事物を模寫するやうにのみしたならば、好句のできる筈はない。

茶もみ一人茶摘六人雇ひけり　碧梧桐
米櫃に穴をあけたり嫁が君　かすみ
床の下を隣へ行くや猫の戀　盧子
養蠶の教師が馬で通りけり　鈴聲

これ等は『ありの儘』を詠み、ありのまゝのやうに詠んだ句であるが斯樣な句に好いのは無い。元來吾人は主觀の色をつけずして客觀のみを寫すこと、恰も鏡の物を映ずるが如くすることは不可能である。無心なる鏡でさへ事物を『ありの儘』に映ずるものでない、鏡の形の如く或は擴大したり、或は縮小したり、或は凹凸させたり、或は歪めたりする況んや神變不可思議なる吾人の主觀を以て事物を觀るをや、其主觀の色彩を帶ぶるは避くべからざる數である。

なほ吾人の注意すべきは模倣は些小なるもの、低卑なるものには可能であるが、雄大なるもの、嵩高なるものには不可能なる一事である。古今の俳句を見るに些小なるもの低卑なるものを澤山詠じてあるが、藝術としての價値が洵に少い。芭蕉七部集と、蕪村七部集とに其例を求めたならば、

明る夜のほのかに嬉し嫁が君　其角
麥飯にやつるゝ戀や猫が妻　芭蕉
すで〳〵と親子摘けり土筆　舟泉
我事と鷸の逃げし根芹哉　丈艸
踏またぐ土堤の切目や蕗の薹　拙候
炭賣の己が妻こそ黑からめ　重五
生花にこと缺く頃や枇杷の花　賀瑞
月雪の身を香に匂ふ海鼠哉　士巧
ふぐ汁の我活ている寢覺哉　蕪村
醉て寢た日のかず〳〵を古暦　几董
ひたぶるに旅僧とめけり納豆汁　月居
振上た我手詠めつあきの蠅　桃喬
桑畑に喰ひつぶしの毛蟲哉　澗李

擧げ來れば限りもないが、何れも詩美の雄渾嵩高なるものは藥にしたくも無い。

這は俳人が眼のつけ處が低いからで、萬象の中に顯れたる造化の秘密に觸れて、靈感を得ないからである。吾人は決して毛蟲、蠅、暦、納豆汁、河豚汁、海鼠、杷、枇花、炭、蕗の薹、土筆、芹、猫の戀、嫁が君などは俳句の主題とすべきものでないと思ふのではない。されど此等のものに他に取り合せがなく、單純に此等の物其れ自身を詠じたならば必ず文藝として取るに足らぬと斷言するに躊躇せぬのである。

吾人が藝術上の作品より得べき快感の第三因は眞である。眞とは自然界の事實を忠實に叙べるので、眞と模倣とは次の點に於て異つてゐる。模倣は物質的で外界の形相に關係し、眞は物質的並びに精神的の兩方面を含むから、外界の形相のみでなく內界の印象、感情、思想をも忠實に叙べるのが眞である。眞には物質の眞もあり、思想の眞もあり、形質の眞もあり、印象の眞もあり感情の眞もある。而して精神的の眞は物質的の眞より百倍も千倍も重要である。

眞と模倣との第二の相異點は眞は符號や象徴を以て叙べることができるから、模倣の如く何物にか似なくてはならぬ必要がない。事實に關する正確なる觀念を與へさへすれば、事實其物の眞を得る譯であるから、事實の眞を得るには其事實に

省るを要せぬ。例せば文藝に於て一の事實を叙ぶる如き、文字や文章は一の徴號に過ぎぬけれども、之に依て事實に關する正確の觀念を讀者に與へたならそれで眞を得たのである。文字や文章は少しも事實に似るものではない。又畫に就て謂へば白紙の上に墨を以て木の枝を描くとするに白紙の上なる黑線は少しも木の枝と似てゐないけれども其黑線が符號と爲つて木の枝の眞を叙べるので、若し木の枝に似るやうに描くには種々な彩色を施して其色澤と形狀とを作らねばならぬ。要するに事物の眞を得るは造化が事物を造つたやうに作者が之を叙べるので、其叙べらるべき事物は內界たると外界たるとに論はないのである。

かゝれば眞は事物の一性を捕へても其眞に契ふけれども模倣は必ず其多性を捕へる必要がある。從つて模倣は眞より困難で、且つ高等であるやうに見える。然れども決して左樣ではない、何となれば模倣は眞を得ないでも眞に近ければそれで成功する。世人は樹木を空色に畫いたり、犬を深紅色に描いたりすれば直ちに其虛僞なるを發見る、されど畫工が人の手を描くに當りて筋肉の配置が其眞を失ひ、關節の構成が其眞を去ること遠しとするも、皮膚の色や、形相や、陰影などに注意

して之を畫くときは觀客はこれに魔魅し去られて稱賛する。

かくして手品に對して吾人が起す所の快感は其虚僞なるを發見するにある如く模倣より得る所の快感は藝術によりて欺かれたるを發見する所にある。これ模倣の劣等なる所以である。故に眞は凡ての藝術の基礎で、模倣は卻て之を破壞する傾向がある。要するに眞ならざる者は決して美なる能はずと謂ふても宜しい。

芭蕉が俳諧に就て

萬代不易あり、一時の變化あり、此二個究まる其本一なり。其一といふは風雅の誠なり。

と說いたのは殆んどラスキンの意見と符合してゐる。風雅の誠卽ち藝術の眞を得なくては萬代不易の文藝はできぬ。芭蕉は更に虚實の說を爲して、

俳句は上手の虚を言ふが如くに綴るといふを金言となして、虚は虚なり。虚を實に綴るを是となし、實を虚に綴るを是とす。實を實といひ、虚を虚と顯はすも俳諧の道にあらず。正風は虚實の間に遊んで、しかも虚實に止まらず、是れ我が家の秘訣也。

と說き、

絲切つて雲となりけり凧
を虚とし、
絲切つて雲より落つる凧
を實とし、
絲切つて雲ともならず凧
を正として、

右虚實を非として、正を是として、此場を虚實の間に遊ぶといふ句の正脉也。

といふてゐる。芭蕉の所謂實とは事實、虚とは想像、正とは想化せられたる事實で虚實の間に遊ぶとは想像のみに馳せて空想に落ちず事實にのみ拘泥して俗に流れぬ所をいふたのである。

ラスキンの所謂眞を得るとは藝術に想像を入れてはならぬとの意ではない。畫工が山水を描くに方りて山や、瀧や、木や、岩や、家や、橋や、人物などを取合せて一幅の圖とする。其取合せは一に其想像力によらねばならぬ。想像力にて此等の物を

取合せたので、必ずしも畫の如き山水が事實の上に存在せねばならぬ次第でない、是れ所謂虚である。然し畫中の山は自然に山の眞を得、水は水の眞を得、木は木、橋は橋、人は人、家は家、岩は岩、各其眞を得なくてはならぬ。是れ所謂實である。岩が芋のやうに畫かれ、人が猿のやうに寫され、木が草のやうに描かれてあつたならば全く畫にならぬ。

されば藝術の眞と事實の眞とは自ら別で、事實の眞とは宇宙の現象其儘の眞であるが、藝術の眞は事實の眞を取り來りて之を想化したものである。芭蕉の所謂風雅の誠とは藝術の眞で、極めて重要なる點であると思ふ。嵐雪が

花に對して、信なくば、花恨みあらん、句は是れにならふべし。花にとへば、花かたる事あらん、すがたはそれに隨ふべし。

といへるは洵に金言で、能く藝術の眞を道破してゐる。又鬼貫が

俳諧の大道は、言ひ習ふにも得ず、句のかたち作りならふにも得ず、唯だ我が平生の氣心高天原に遊んで、雪月花の誠なるに戯れ、神妙を知らば、目に見えぬ夢の浮橋、足さはらずして、踏むに心よき地平たらん、その花に鳴くうぐひす、其れに住む

蛙、いづれの歌袋も、すべて天地の袋なり。

といふたのも同じ心であらう。

こゝに一つ注意すべきは眞を得るといふも吾人が平生三百六十五日見なれ聞きなれしてゐる事實のみが必ず眞なのではない。旭日、夕陽などの特に美しき壯觀は一年に一度、二三年に一度、現はるゝこともある。此事實は平凡なる吾人の看過する所である。又大洋の怒濤狂瀾の壯觀の如きは海上を家とする水夫ならでは容易に見られぬものである。藝術家が斯の如き自然の美に注目して其眞を叙べたなら傑作ができやう。其角が

伏見にて一夜俳諧もよほされけるに、傍より芭蕉翁の名句いづれにてや侍ると尋ねられけり、折ふしの機嫌にては大津尙白亭にて、

辛崎の松は花より朧にて

と申されけるこそ、一句の首尾言外の意味、近江の人も求だ見のこしたるなるべし。

といふた如く、芭蕉の如きは近江の人の朝夕に見つゝしかも見のこしたる所を見

出して其眞を叙べたから、名句を得たに相違なし。芭蕉の二十五條の中に

一、霞は朝うすく、夕に深し
一、霧は朝深く、夕にうすし
一、春風は朝に寒し
一、秋風は夕に寒し
一、川音は晝靜に夜さわがし
一、海の音は晝さわがしく夜靜なり

とある、何でもない事のやうであるが、常人は皆看過しつゝある自然の秘密である。

支考が

有情の物は更にもいはず、無情の草木瓦石より道具ひやうしぎに至るまで、己々が本情をそなへて人情にかはるべからず、其本情にいたらぬ人は、月花に對して月花を知らず。

と說いたのは實に面白い、卽ち彼が所謂物の本情が卽ち眞である。鬼貫は四季の月に就て

▲春の月は、くれそむるより朧たちて、物たらぬけしき。
▲夏の月は、灯を遠く置いて詠め深し。
▲秋の月は、窓に軒に、海に川に、野に山に。
▲冬の月は、一むら雲の、雨こぼし行く隙を照していそがし。

といひ、花については

卯の花は郭公と中よく、あるは月と見て、闇を忘れ、雪と見て寒からず。
蓮の花は朝のながめ、一入いさぎよく、晝は又涼し、夕ぐれは心沈む。猶ほ深く賞して觀念の奥に至らば、埋もれたる佛性、終に妄心の泥をも出づべし。
荻のさかりは、野をわけ入て、かいくるゝをも知らず、人の庭にあつては、露ふく風に花をおもひ、かたぶく月に俤を惜む。又花もやがてならんと見る頃の風情こそ、いひしらずをかしけれ。愛する人のまれなるぞ、うらみには侍る。

といひ、一茶が

夏風は電の方より來る。
秋風は電に向つて吹く。

といふた如きは事實に合するや否やは暫く措いて、衆人の注目せざる處に彼等が眼光を放つを證するに足る。

自然界の美のみではない、精神界の美の如きも、十年に一度、百年に一度といふやうに稀に見る所の忠臣孝子、貞女烈婦等の高尚にして美しき情操を捕へて其眞を叙する時は傑作となるや疑ない。さるを平凡なる作者は平凡なる常情、しかも卑陋にして愚劣なる男女にありふれた人情などを叙して人生の半面を描くなど稱してゐるは笑ふべきでないか。譬へば庭にて見れば平凡なる梅も月ヶ瀬にて觀れば一段の光采を添へ、野にて見れば何の風情なき櫻も嵐山にて觀れば一段の妙趣がある如く、人情も凡俗なる家庭にて見れば何の妙趣もないが、之を異れる境遇に移せば非常に高尚にして優美なる現象を呈する、之を看過せずして其眞を叙するのが眞に人生の秘奥を闡明するのである。白雄が

俳諧は狂言綺語に似たりと雖も、心の誠より出づるわざ也。

といひたる如く、心の誠が何より肝要であると思ふ。

芭蕉が俳壇に於ける大功は心の誠に重きを置いて俳諧に永久の價値を與へた點にある。又彼は閑寂に力を用ひて俳諧を俗塵の中より救ひ出した、此二點は實に沒すべからざる芭蕉の大功である。惜い哉彼に倣ふ者は徒らに閑寂を追求して藝術の神髄と誤解した、支考が

淋しきは風雅の實なり

と公言したるが如きはそれである。閑寂は芭蕉が一種の厭世觀より出て、沈靜を好むは彼の性癖であつた。許六が

翁曰く汝は閑寂にして山林にてもる心地する事を悦ぶにあらずや。答曰然り。翁曰我も好む所かくの如し。我が風は閑寂を好みて細し。

と記したるにても知れる。閑寂、溫雅、幽玄、沈着、纖細は正風の特色とする所である。芭蕉は決して純然たる客觀を歌ふたものでない、否、多く觀相を用ひた、されば人口に膾炙する彼の名句は皆觀相の句である、例せば

古池や蛙飛び込む水の音
枯枝に烏とまりけり秋の暮
夏草やつは者共が夢の跡

五月雨を集めて早し最上川

いざさらば雪見にころぶ所まで

象潟の雨や西施が合歡の花

擧け來れば澤山あるけれども皆此轍である。芭蕉は斯く主觀的の詩人であるが、猶ほ客觀詩人と稱せらるべき理由がある、幷は彼が客觀的なる自然の美に力を用ゐて主觀的なる人事上に見るべき精神的の美を歌はなかつたことである。

次に吾人が藝術上の作品より得べき快感の原因は美である。吾人は美とは何ぞやとの疑問には答ふることはできぬが、何人も事物の外部に彰はれたる性情を觀察して快感を得る、これ卽ち美である。吾人は或形、或色に就ては愉快に感ずるが、他の形、他の色に就ては愉快に感せぬ、其理由は飲酒家が酒を好んで餅を嫌ふと同じで、說明することはできぬ。美感は情に訴へるもの故、直接には知性の活動を要せぬ、然れども、適度、關係、對稱等を知覺する知的活動が美感に必要なるは言ふまでも無からう。畢竟ずるに美なる物とは吾人の心情を滿足し、吾人の精神を淸らかならしめ、高尙ならしむる者である。天地間の萬物は造化の妙手に出で、一として

美ならざるはない。されど美は必ず事物を大觀する上に生ずるもので、事物を分析解剖する上に生ずるものでないから、宇宙の萬象を分析的に觀ては美感は沒卻せられてしまう。若し萬象を大觀したならば絕大の美はこゝに在る。藝術より得る吾人の快感は美を以て最高のものとする。

美にも種々なる階段があつて不完全なるもあり、完全なるもあり、而して最も完全な理想的の美とは如何なるものかといふに種に具つてゐる美を個體に完備した場合である。例せば女性全般に具はつてゐる美を悉く一個の少女に完備したなら、當該少女は理想の美人である。ラスキンが美に對する考は大略左の如くである。

くれ〳〵吾人の忘れてはならぬことは美とは吾人の精神を滿足せしめ淸淨ならしめ、高尙ならしむる者である。

芭蕉は能く宇宙を大觀して造化の妙手に接したる詩人である。されば、

造化に從ひて四時を友とす、見る所花にあらずといふ事なし、思ふ所月にあらずといふ事なし、像、花にあらざる時は夷狄にひとし、心、月にあらざる時は鳥獸に類す、夷狄を出て、鳥獸をはなれて造化にしたがひ、造化にかいれとなり。

とは彼が風雅の神髄である。さるを彼が高弟其角の如きは其縱横の才に任せて師門の溫雅、閑寂を打破して、廣く詩材を求め、遂には脫肛、遺精、脣虛、雁瘡等まで其句中に詠み入れて恬然たるに至つた。こゝに至つては美文ではなく、醜文と謂はざるを得ぬ、何となれば此等の詩材は吾人の精神を不滿足ならしめ、汚穢ならしめ、墮落せしむるからである。

我國現代の文士等が文藝の爲の文藝なりと稱して、社會の汚俗を描き、男女の醜行を峻酷に叙述して以て人生の眞を得たりと思ひ、藝術の目的に契へりとするは大なる謬見である。藝術は藝術として貴ぶべきもので教育や、道德の爲めの手段では無い。這は三歲の童子にも知れた理窟である。然し眞の藝術は決して教育や道德に背くべきものでない、道德や教育を犧牲にすべき筈のものでない。何となれば藝術の主とする所は美である、美は吾人の心を滿足せしめ清潔ならしめ高尙ならしむる者である。故に文藝にして美を主眼とする以上は教育や道德と矛盾する筈はない、然るを文藝の主眼たる美を沒卻して人心を墮落せしめ、汚穢ならしむるやうな醜を描いて文藝と稱してゐるは慥かに謬見である。繪畫は繪畫の爲

の繪畫である、道德や、教育の爲の手段でない。されど眞に美なる繪畫は道德の爲にも教育の爲に有益である。繪畫が其主眼たる美を沒卻して人心を不快ならしめ、汚穢ならしむる春畫となるから、醜術となり了つて、教育や道德にも害を及ぼすのである。今日の文藝が風俗を壞亂し、士君子の心を不快ならしむる以上は美文でなくて醜文である。吾人は此點について現代文士の反省を乞はざるを得ぬ。

芭蕉と蕪村とは我國俳界の二大明星であるが、美の點よりいふ時は蕪村は芭蕉に勝つてゐる。并は芭蕉は萬事悲觀的消極的であるから、淋しく細くのみなつてしまう。之に反して蕪村は積極的樂觀的であるから豐かに艶かに美を發揮することができた。又芭蕉は自然美にのみ力を用ひたけれども蕪村は自然美にも人事美にも其手腕を振つた。又芭蕉は實在に眼をつけたが蕪村は現象に眼をつけた、これらは二大詩人を區別すべき重要なる相違點であると思ふ。

筏士の簑や嵐の花衣　蕪村
春雨や綱が袂に小提灯　同
畑打や法三章の札のもと　同

閻王の口や牡丹を吐かんとす　同

青梅に眉あつめたる美人哉　同

名月や神泉苑の魚躍る　同

以て其豐艶の想を見るべきである。又蕪村は句法が清新で、何物をも詩化する手腕があつた。

心太逆しまに銀河三千尺　蕪村

酒を煮る家の女房ちよとほれた　同

鰒の贅先生文を揮はれたり　同

柳散り清水涸れ石ところ〴〵　同

如何にも大膽なる作句の風である。是の如き大膽と伎倆とを以て嵩高の美を歌ふたなら鬼に金棒の感があつたらうが、惜しい哉、蕪村には殆んど嵩高雄大の句がない。

嵩高とは美の雄大なるもので多少危險の念が伴ふ時に生ずる快感である。例せば輕氣球に搭して十里二十里に亘る大野戰の光景を下瞰するが如き、又は崖下に

立て萬仞の飛瀑が頂上より殷雷の如き響を以て投下するを見るが如き、又は大艦の甲板に坐して烈風狂濤の相戰ふて、千仞の海底に船を呑まんとするを見るが如き、何れも嵩高雄大の快感を生ずる。さりながら此快感は恐怖の念を生ずる時は忽ち消失する。故に危險の伴ふは一の要件であるが、危險が變して恐怖となつてはならぬ。これに就て面白い話がある。

夏日東都を去りて暑を日光に避けたる紅葉思案の二作家、湯本の靈泉に溫浴して俗膓を洗ひ、華嚴の瀧、中禪寺の湖、或時は粉川の一口水に嗽ぎて、冷氷の及ぶ所にあらざるを稱し、或時は慈悲心鳥の鳴き去るを聽いて、杜鵑更に一歩を輸すなどゝ歎ずる折柄、會〻田山花袋の南谷より來るに會して、黑髮の山中に岩茸を狩らん事を約し、杉松蓊鬱たる間、岩石重疊の裏を過ぎて行くに、諸文學の美論より引きて、雄大（サブライム）の事に及ぶ。紅葉は雄大には少しく恐怖の念伴ふといひ、花袋は少々なりとも恐怖の念の伴ひては、雄大にあらずと論じ、思案は口を結びて之に關せざるものゝ如かりしが、日光名物の俄夕立、大雷四山に裂け、急電溪流に碎け、物凄き事限りなし。斯くても尙ほ紅葉は雄大を論及して、何ぞ恐怖の念の伴ひた

りとて、雄大を損ずることあらんやと大聲ず。花袋は萎縮して、否とよ、余は今全く恐怖の念のみ高くして、雄大を感せずと。此時二三間の前に當りて慥かに落雷なしぬ。流石の紅葉も亦雄大を言はず。

これ嵩高雄大に恐怖の伴ふ能はざる實證である。

嵩高は如何なる種類の美にても其偉大なる時に生ずる快感で物質にても、空間にても、力にても、德にても、其雄偉なるものに接すれば起る。されば必ずしも危險の伴ふを要せぬけれども、多くの場合に多少の危險が伴ふのが事實である。此快感は吾人の同情を刺戟したり、勇氣を鼓舞したり、精神を向上せしめたりして、卑陋賤劣なる思想を起すに遑あらざらむる力がある。

俳句にて嵩高雄大の快感を與へるは最も困難であるから、蕪村ほどの手腕があつても六づかしいに相違ない。元來我國の文學は嵩高の美に乏しい、箱庭的文學、室内旅行的文學であるから蕪村一人を咎めるは無理である。

荒海や佐渡に横ふ天の川　芭蕉
猪も共に吹かるゝ野分哉　同

五月雨を集めて早し最上川　同
稻妻の遠山松にかゝりけり　一茶
木曾山へ流れ込けり天の川　同
木枯に二日の月の吹きちるか　荷兮
木枯や海一ぱいに出る月　士朗
曉や鯨のほゆる霜の海　曉臺
角力取ならぶや秋の唐錦　嵐雪
冬木立月骨髓に入る夜哉　几董

雄大なる想にては芭蕉に及ぶものはない、其芭蕉の作にさへ嵩高の美は少いから他の俳人には猶ほさらである。此點は我國文藝の一大缺點であるから新進の作家が意をこゝに致されんことを希望して止まぬ。

ラスキンは更に吾人が藝術上より得べき快感の原因を關係の觀念として論じてゐるが今は必要がないからこれにて筆を閣く。